

「認め合ひの大切さ」

4年 H・Mくん

この話に登場する人たちは、皆、一生懸命ですが、家族との関係がうまくいきません。お父さんは、自分の理想にばかり夢中で身近な家族への気遣いが足りません。お母さんは仕事や家事を精一杯がんばっているけれど、いつも心に余裕が無く、いらいらしています。ミンミンには、子どもを「くしたつらい過去があります。当時学校の先生だったミンミンは仕事を優先し、具合の悪い我が子の元にかけることが出来なかったことを悔やみ、今は周りの都合はお構いなしに、自分にとってその時一番大切なことを優先します。主人公の悠介は、そんな大人との間で板ばさみになり、いつも空気を読みながら波風立てないようにやり過でています。ほくは、この話を読んで、考え方や立場の違い者同士がどうつき合っていくかという点について考えました。

ほくも時々友達とけんかをします。ほくは、一度相手をきらいになってしまおうと、「なるべく関わらないようにしたい。あんなやついなくなればいいのに。」とつい思ってしまいます。でも、そうしてどんどんきらいになってしまったら、最後には一人ぼっちになってしまいます。自分と違う考えや性格を受け入れることは難しいけれど人は周りの人とながつながって生きています。誰も一人では生きられません。自分と違うところはその人の個性だと考え、相手を認め、自分も認めてもらうことが大切だと思います。ほくの学校にミンミンのように言いたいことをすけすけ言う外国人の友達がいいます。今までは苦手意識を持っていましたが、この本を読んで、言いたいことを言うのは必ずしも悪いことでは無い、それも個性だと思えるようになりました。題名の「まっすくな地平線」とは、作者が伝えたい心のあり方であるように思いました。まっすくな地平線のような見通しの良い広い心で見渡せば、一番大切な物が見えてくると伝えたかったのではないのでしょうか。